

Jazz Interview Vol.1

ジャズ・ベースの巨匠

Charlie Haden

第47回グラミー賞

「ベストラテンアルバム賞」受賞！

3/14 ~ 3/19 ブルーノート東京で行われた

キューバの天才ピアニスト、ゴンサロ・ルバルカバ

とのデュオ公演でも最高のステージを披露！ 取材 & 文：加瀬正之



—まずは、グラミー賞受賞おめでとうございます。

サンキュー。

—あなたにとってグラミー賞とは？

映画のオスカー賞と同じで、音楽関係者が認めてくれた賞なのでとても嬉しい。

—今後の予定は？

これから、『ランド・オブ・ザ・サン』（グラミー賞受賞アルバム）のバンドでのツアーがあるんだけど、新しい“リベレーション・ミュージック・オーケストラ”のレコーディングがもう終わっているから、そのアルバムのツアーが10月から始まる（アルバムは8月にリリース予定）。レコーディングに関しては、ブラッド・メルドー（p）とデュオ、それとソニー・ロリンズとも予定があるんだ。あとは、私の家族と一緒にカントリー・ミュージックをレコーディングする計画もある。

—あなたは、アイオワ州で生まれ、地元ラジオ局で「ヘイデン・ファミリー・ラジオ・ショー」を受け持つ音楽一家に育ったそうですね。

父親がMCをやっていたんだ。家族では私が生まれる前からショーをやっていたんだよ。私も2歳の時から家族に交じって歌っていた。

—ベースを弾き始めたは何才からですか？

ベースは14歳の時からだね。勿論、アップライト・ベースだよ。

私はエレキは全く弾かないけれど、今、息子が弾いている。

—ベースは独学で学んだということですか？

私が育った中西部の地域では、それほどたくさんミュージシャンがいなかったんだ。だから、レコードに合わせて弾いたりしながら勉強した。その後、ロサンゼルスに移ってからは、素晴らしいミュージシャンたちと演奏する機会が増えたんだ。私の場合は、素晴らしいミュージシャンと一緒に音楽を演奏することで多くのことを学んでいった。ハンプトン・ホーズ（p）なんかはその一人だね。そうやっていろいろなミュージシャンと共演していくうちに、オーネット・コールマンとも出会ったんだ。

—一番初めに憧れたベーシストは誰ですか？

ジャズ・ベーシストの中では、セロニアス・モンクと一緒にやったウィルバー・ウェアーだね。ジミー・ブラントも勿論好きだったし、他にもウォルター・ペイジや、デューク・エリントンの楽団でプレイしたウェルマン・ブロー、アーマッド・ジャマルの最初のベーシストだったイスラエル・クロスピー、オスカール・ペティフォード、ポール・チェンバースもみんな美しい

サウンドを持っていて、本当に素晴らしいベーシストだった。

—あなたは、キース・ジャレット・トリオの名盤『サムホエア・ビフォー』の「モーメント・フォー・ティアーズ」で素晴らしいアルコ（弓弾き）を披露していますが、アルコも独学で学んだのですか？

「モーメント・フォー・ティアーズ」で、私がアルコを弾いていたのはよく覚えてないね（笑）。それに私がアルコを弾く場面はとても限られていて、ちょっと変わったサウンドを出したい時や、エンディングで音を伸ばしたい時などに使うくらいで、本格的にアルコを学んだことはないんだ。

—あなたは現在も California Institute of the Arts で音楽を教えているそうですね。

1982年から教え始めて、今も毎週水曜日に教えているよ。私が教えていることは、若いミュージシャンたちに自分の音楽や自分のサウンドを知る方法を見つける手引きをすることで、インプロビゼーションの中でも、特に精神面を指導している。

—あなたに憧れてベースを弾いている人もたくさんいると思いますが、ベースを弾く上で大切なことは？

感謝の気持ちと謙遜する心、人に与えるという気持ち。こういう心を持ったミュージシャンになるための努力をすることが大切で、そういう人間になれば、もしかしたら素晴らしいミュージシャンになれるかもしれないよ。

—あなた程のレベルまで達すると、ベースという楽器に対してどのように感じているのですか？

勿論、楽器が体の一部になっていることも確かだけれど、今でも演奏する度に新たな発見がある。私にインスピレーションを与えてくれる素晴らしいミュージシャンと共演することで、新しい発見をする機会に恵まれるんだ。

—愛用のベースについて教えてください。

今、ベースは2台持っていて、1台は1967年に入手したベースで、1840年にフランスで製作された“ジョン・パップティスト・ヴィオン”というメーカーのもの。これまでのほとんどのレコーディングで使っているものだ。これは本当に愛用しているから、ツアーへは持って行かないようにしている。もう1台は、今回のブルーノートでのライブでも使用している南フランス製のもの、で、“ジャン・アレイ”という人が作ってくれたもの。これは自分の音楽に合わせて製作してくれた特別なもので、とても気に入っている。ツアーではこの楽器を持ち運んでいるんだ。あと、もう1台持っていたんだけど、それはほとんど弾

なかったから、最近ニューヨークで売ってしまっただ。

——弦は何を使っているのですか？

GとDの弦だけガット弦で、AとEはメタル製の弦を使っている。高音弦にガット弦を使うと、とても良木の音が鳴るんだ。でも、低音弦では張力の調整がとても難しい。だから、低音弦にはナチュラルな音が出るトマスティック製のスパイロコアというメタル製の弦を使っている。ガット弦はダダリオ製のものを使っているけど、材料の確保が難しいらしくて、今は製造中止になっているんじゃないかな。

——次の5人のジャズ・ベーシストについて、あなたのコメントを開きたいのですが。

《チャールス・ミンガスについて》

彼はミュージシャンとしても作曲家としても、バンドをまとめるリーダーとしての才能もあったし、とても明確なビジョンを持っていて本当に素晴らしいミュージシャンだった。勿論、ベースのテクニックも素晴らしいし、直ぐに彼だとわかるスタイルも持っていたしね。個人的には、彼のベース・プレイよりも楽曲の方に親しみを覚えていた。

《スコット・ラフナーについて》

スコットとはアパートもシェアしていたほどで、私にとっては兄弟といえるくらい親友だった。ベーシストとしても、4拍を全てウォーキングで埋めるのではなく、スペース（間）を与えることを試みた最初のベーシストの一人だね。彼はベースを弾く前は、サクスを吹いていたんだ。でも、ある時バンドで演奏していた時に、ベーシストが来ないことがあって、スコットが代わりにベースを弾くことになり、それがきっかけでベースを弾くようになったんだ。だから、彼はソニー・ロリンズなどのサクス奏者に強い影響を受けていたね。残念なのが若くして亡くなってしまったけれど、元々革新的なベースを弾いていた彼がもし今生きていたら、もっと凄いインパクトを与えるベースを弾いていたはずだよ。

《リロイ・ウィネガーについて》

リロイとはとても素晴らしいサウンドを持っていたし、特にウォーキングが素晴らしいかった。彼は共演するドラマーをもっとシンクさせるようなベースを弾くことができたし、それくらい強力な音を出していた。まさにグレート・ウォーカーだね。

《ポール・チェンバースについて》

彼のサウンドには非常に深みがあって、本当に泣いているんじゃないかと思うくらいの感情が宿ったベースを弾いていた。初めて彼の演奏を生で見たのは、ロサンゼルスでマイルス・デイビスやジョン・コルトレーンと弾いていた時で、まさしく確かめたのは、本当に彼が泣いているんだろうかと彼の目を見たことだった（笑）。その後、実際に会って話もしたけれど、人間的にもミュージシャンとしても本当に素晴らしい人だった。

《ジャコ・パストリアスについて》

初めて彼に会ったのは、フロリダのマイアミ大学でのコンサートで、チャールス・ミンガスなど、みんな対バンで演奏していた時だった。“ファウンテン・ブルー”というホテルに滞在していて、そのラウンジでレッド・ロドニーたちと一緒にジャコの演奏を聴いていたんだ。コンサートの後にジャコが私の所に来て、「一緒に話したい」と言ってきた。それで、「あなたのベースを弾かせてくれますか？」と言うんで、私の部屋でベースを弾いていたけど、これが結構いい音を出していたんだよ（！）。また、この時にチャーリー（ミンガス）がレンタルしていたベースが気に入らなくて、私に「おまえのベースを貸してくれないか？」と言ってきたんで、「いや、差し上げますよ」と言ったんだ（笑）。それでチャーリーが、「いや、くれなくていい。ちょっと貸してくれるだけでいいんだ」なんていう話をしたのも覚えているね。



——今後共演してみたいミュージシャンはいますか？

私が一緒に演奏したいと思っていたミュージシャンとは、ほとんど共演してきているけど、私が本当に一緒に演奏したいと思っているミュージシャンの多くは、既に亡くなってしまっている。チャーリー・パーカーや、バド・パウエル、ジャング・ラインハルトとか…。一度でいいから共演してみたいかな。

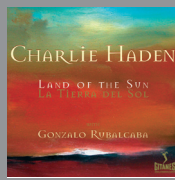
——これまであなたが関わった作品の中で、一枚だけ選ぶとしたらどの作品を選びますか？

それは難しい質問だね…。いろいろあるけれど、ハンク・ジョーンズとのアルバム『スティール・アウェイ』とか、オーネットと最初のレコーディングした『ディス・イズ・アワー・ミュージック』、コルトレーンとレコーディングした『アヴァンギャルド』、自分の最初のソロ・アルバム『リベレーション・ミュージック・オーケストラ』もそうだし、あとはあまり話題にはならなかったけど、マイケル・ブレッカーやブラッド・メルドー、ブライアン・プレイドと共演した『アメリカン・ドリームス』もいいね。でも、特に『リベレーション・ミュージック・オーケストラ』は、新しい方向性を示したという意味で、とても気に入っているアルバムではあるね。…でも、一枚だけ選ぶのは難しい過ぎるね。

——最後に、あなたの目指すジャズ・音楽について聞かせて下さい。

私が目指しているのは、想像豊かなインプロビゼーションの音楽をより多くの人に、今までジャズを聴いたことがない人たちにも広めること。ジャズのミュージシャンの中には、ジャズしか演奏したくないという人たちも多いけれど、私はいつも“音楽”を演奏したいと思っているんだ。

第47回グラミー賞「ベストラテンアルバム賞」受賞作品



Land Of The Sun Charlie Haden with Gonzalo Rubalcaba

Charlie Haden (b), Gonzalo Rubalcaba (p, arr), Ignacio Berrero (ds), Michael Rodriguez (tp), Miguel Zenon (as), Jose Laviana (ts), Oriente Lopez (fl), Lionel Loueke, Larry Koonse (g), Juan De La Cruz (Trioletiste) (bongo)
1. Fuiste Tu (I Was You) 2. Sueno Solo Can Tu Amor (I Only Dream Of Your Love) 3. Cancion De Cuna A Patricia (Lullaby For Patricia) 4. Solamente Una Vez (You Belong To My Heart) 5. Nostalgia 6. De Siempre (Forever) 7. Anonanza (Longing) 8. Cuando Te Podre Ovidir (When Will I Forget You) 9. Esta Tarde Vi Llover (Yesterday I Heard The Rain) 10. Cancion A Paula (Paula's Song)

ユニバーサル: UCCV-1063
¥2,600 (tax in) Now On Sale!